

# 平成30年度 横浜市世界を目指す若者応援事業

## (個人留学による帰国報告)

### ●氏名

KYさん

### ●留学先

国/都市：米国/ネバタ州 ヘンダーソン

外国の高校：フットヒル高校

### ●留学期間

2018年8月8日～2019年6月25日

### ●留学先での活動、留学で学んだこと

#### アメリカで学んだこと

私は去年の夏から約10ヶ月の間、アメリカに留学していた。私は物心がつく前に一度だけ家族でハワイに観光に訪れたことがあったが、海外に1人で約1年もの間暮らすというのは私にとっては大事であった。アメリカでは現地の学校に現地の生徒と一緒に通わなければならない、当然のように授業は英語で展開されていた。アメリカでは自分の意見を持ち、それを授業中に発言してディスカッションをすることが普通とされており、特に英語や倫理の授業ではとても苦勞した。これらの授業では、発言することである程度成績に反映されていたので、私の成績は決して良いものではなかったが、周囲の人間に意見を合わせて生きてきた私にとって、自分の意見をきちんと持ち、それを他の人と話し合うという経験は貴重なものであった。特に倫理では、ある特定の状況において自分はどのように行動するかなどをクラスで話し合うのだが、自分が思いつかないような意見を持ってそれを堂々と発言している同級生が沢山いた。自分の意見を持って他者と意見を交換することで、他者に一方的に意見を押し付けるもしくは押し付けられることが無くなりまた、認め合うことができれば互いに強制する必要がなくなるからだ。

一般的にアメリカの人はフレンドリーでオープンなイメージが日本ではある。私も留学前はそのような先入観を持って渡米したのだが、アメリカ人でもフレンドリーな人とそうではない人がいることが分かった。自分から話しかけなければ誰も話しかけてこないのである。たしかに日本に他国からの留学生が突然来て、フレンドリーに話し掛ける人は少ないだろう。日本では知らない人にはあまり話しかけないが自分に身近な人とは親密な関係を築く傾向がある一方で、アメリカでは基本的に初対面の人に対しても目が合ったら挨拶をする。しかし、あまり深い会話をすることは少ない。アメリカ人は浅く広い人間関係を大切にしているのだ。私は当初、1つのホストファミ

リーと約10ヶ月間共に過ごす予定だったのだが、様々な事情により、合計で3つ、短期間のものも含めると5つの家庭で受け入れられた。始めの家庭では約6ヶ月、2つ目の家庭では3ヶ月、最後の家庭では約1ヶ月の間お世話になった。アメリカの家庭では夫婦共に働いており、子供が家事をするというのが一般的だった。日本では私はあまり家事をしたことがなく、家庭科の宿題や母の体調が優れない時に少し手伝う程度だったが、アメリカでは家の決まりなどで家事の役割分担がされており、必ずみんなやるべき家事が振り分けられていた。アメリカの子供は日本の子供に比べて大人びており、自立している。大学などに行くにしても彼らは奨学金を利用したり自分で働いて学費を稼ぐのである。私の同級生の中にはローンを組んで車を自分で買って所有している人もいるくらいなのだ。私も例外なくやらなければならない家事を振り分けられて毎日やっていた。アメリカの学校に持って行く昼ごはんも自分で前の晩に作り、朝ごはんも自分で作って食べていかなければならないのだ。私は学校にバスで通っていたため、毎朝5時45分には起床して準備をし、6時には家を出ていなければならなかった。私のホストファミリーはそれよりも後に起床するため、私は毎朝寝坊することなく学校に行かなければならなかった。このような生活において、私は自立心を身につけた。日本にいた時は、朝は母に起こしてもらい、朝ごはんも母に作ってもらい、遅刻しそうになったら車で駅まで送ってもらっていたのだ。何か問題が起きたとしても両親や友人、学校に頼りきりで自分ではほとんど何もしていなかった。当然のように自分の行動に責任は感じておらず、仮に失敗しても周りがどうにかしてくれると考えていた。しかし、アメリカでの生活の中では両親とは離れており、母国語である日本語も全く通じない。また、自分の行動には自分で責任を持たねばならなかった。当然ながら、アメリカでは常に英語で話さなければならず、他者とコミュニケーションを取れるようになるのにしばらく時間がかかった。私は始めのホストファミリーとトラブルを起こしてしまい、結果としてホストファミリーを変更することになってしまったのだが、その際も日本にいる両親や先生に頼ることもできず、拙い英語で現地の大人に相談して自分で解決しなければならなかった。異国の地で現地の人と合わずに、自分の両親などに頼ることができない中、現地の大人達に英語で相談して自分で解決するというのはとても大変なことで、孤独などで常に不安であった。

私は先ほど、始めのホストファミリーと合わずにホストファミリーを変更したということ述べたのだが、次のホストファミリーと最後のホストファミリーはとても良い人で、私が始めのホストファミリーの家で経験した嫌な思い出を親身になって聞いてくださった。私のことを常に気遣ってくれ、私が感じているどんなに些細な不安な事でも、時間をとって相談してくださった。確かに始めのホストファミリーの家では決して良いとは言えない経験をしたが、その分現地の人々の温かさが身にしみた。また、そのように現地の人々に相談した結果、微妙ではあるが英語力が上がり、自分から人に相談するということができるようになった。

アメリカでは日本からの留学生ということで、現地の学校で日本についての説明をしていた。日本の文化として、折り紙や箸、食べ物、サブカルチャーなどの説明を小学校に行ったり、自分の学校で話したのだが、みんなしっかり聞いてくれ、私が思いもつかないような質問をたくさん受けた。この質問に答えている中で自分がまだ日本の文化について熟知しているわけではないことが分かった。出国前は日本の少子高齢化の対策やLGBTに対する意識の低さ、そして過労死などについて私は日本に対し

て負のイメージしか持っておらず、批判してばかりであった。しかしながら、現地の人々が笑顔で日本食を食べたり日本の伝統的な遊びを楽しんだり、また日本のアニメや漫画を見ている姿を見て、アメリカに行く前は気づかなかった日本の魅力を改めて知ることができた。また、自分の視野が前に比べて広がった事も実感している。日本にいた時は男子校という比較的閉鎖的な環境の中、家と学校の往復だけで生活していた為、視野が狭かったのだが、渡米して現地の学校で現地の人々と生活をしていた中で、沢山のひとと出会い、沢山の考え方や価値観を共有することができた。人種のもつと形容されるアメリカでは多種の人種や民族が生活しており、アジア系、ネイティブアメリカン、ヒスパニック、黒人などと沢山のひと種が合わさって形成されている国なのである。異なる人種が集まれば異なる文化が集まるわけである。アメリカはそれぞれの文化が混じり合っ同化し、1つの独特な共通している文化を形成している国である。それはアメリカの食からも伺えるのだ。日本で異国の食べ物を作る時はその国の料理を忠実に再現し、それをさらに美味しくする傾向がある一方で、アメリカでは他国の料理の良いところをきちんと認め、それを使いアメリカ人の口に合うようにアレンジを加えているのだ。私はアメリカで寿司を食べたのだが、日本で考えられている握りなどとは違ってアメリカでは巻き寿司が主流である。理由として、アメリカ人にとっては魚を調理しないで食べるということに対して抵抗があることが挙げられる。アメリカの巻き寿司の中には卵やマヨネーズ、焼いた魚と米が含まれており、それを海苔で巻く、カリフォルニアロールというのが有名である。これであればアメリカで生魚を食べることに抵抗のある人でも抵抗なく寿司を楽しむことができるのだ。他にもメキシコ料理やフランス料理、イタリア料理や中華料理などあげればきりが無いのだが、アメリカの人々が好みそうな味付けなどがなされている。他国の料理とアメリカの調理方法を結びつける方法はアメリカの国としてのあり方が伺えると私は思う。

出国前、私はアメリカ人のことを日本人とは違う外国人と考えていた。日本と比べれば考えや文化、食べ物までもが違うものと考えていた。確かに日本とは生活様式が異なり、子供は自立している。食べ物も日本に比べたらあまり美味しい訳ではなく、油が多量に使用されている為、不健康である。ただ、言語や文化、肌の色や顔が違えど、スポーツやテレビを楽しむという点は全く変わらないのだ。日本では外国人に対して自分とは異なるものとして排他的な姿勢をとっていたが、これからは自分と異なる人を認めて受け入れられるように生きていきたい。